



目 次

あいさつ (工学部長・校友会長・父兄会長)	2 ~ 3
学術研究報告会開かれる	3
欧州各国を視察して	4
米国研究生活一年間	5
工学部三十年史編纂	6
諸会合報告	7 ~ 8
クラブ便り	9
ストーブ寄贈その他	10
CAMPUS mini MEMO	11
事務局だより	12



《金山橋から工学部正門に続くプラタナスの並木通り》

新しい年を迎えて

日本大学工学部
部長 外木有光



卒業生の皆様には昨今の不況にもかかわらず、佳き新年を迎えたこととお慶びいたします。そして卒業してからの歳月を数えてあれこれと感慨にふけったことでしょう。

わが工学部も明けて30年の星霜を積み重ねたことになります。福島県からの要請があり、東京の駿河台にあった専門部工科をこの地に移設して、新制の学部に昇格させ、日本大学の一学部とすることを決定したのは古田重二良先生でした。当時はここは雑草が生い茂って荒れ果てた土地にバラックにも等しい建物が点在し、爆撃の跡も生々しく、航空機の部品が散乱して、学校というには余りにもお粗末な環境でした。しかしこのような場所に新しい学部を建て、現在あるような学園になし得ると見透された古田先生の炯眼にはただただ敬服するのみです。

昭和31年に現在の校地が県から日本大学に無償で譲与されるまでの古田先生の御骨折・御苦労もまた並大抵のことではありませんでした。このようにわが工学部の誕生から基礎を固め、飛躍的な発展をするに至るまで古田先生が尽力された御功績は量り知れないものがあります。

日本大学校友会福島県支部・日本大学工学部校友会・日本大学工学部父兄会の代表が集って古田先生の御功績を顕彰するため、先生の銅像を建立しようとの議が諮られ、意見の一致をみました。この事業に工学部・東北工業高等学校の教職員も一体となって参加し、広く関係各位・校友に募金を呼びかけその完成を期しています。

工学部では30周年記念事業として、記念館の建設・学部史の編纂・記念論文集の刊行などを計画しています。このように多彩な行事を計画・実施できるまでになったのも先輩諸兄のお骨折の賜であり、われわれはこれをさらに一歩進める努力をしています。

工学部充実の外面は御覧になれば判りますが、内面的には教職員の増強にともない、毎年おこなわれている学内研究発表会で100件を越す発表があることからも端的にそれを推察いただけると思います。

さらに新しい実験棟の建設、大学院・工学研究所の建築計画などがまだ残っていますが、30周年を期して飛躍的な発展を願っています。ここに工学部の近況を述べ、卒業生諸兄の御努力が工業技術の進展に大きな貢献をし、いよいよ御発展あらんことを希って年頭の挨拶といたします。

(日本大学教授・日本大学工学部校友会顧問)

ごあいさつ

日本大学工学部校友会
会長 松山光克



全国各地で御活躍の校友諸氏におかれましては、常日頃、本会活動のために御協力をいただき、誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

御存知のとおり、日本大学工学部は昭和52年度をもって開設以来30年の星霜が過ぎ去りました。この間、工学部は、関係各位、並びに諸先輩各位の御努力が、見事に結実し教授陣容、施設設備共々に充実して、他の大学に比べて、勝るとも劣らない立派な学園になりました。

工学部では、創設30周年を記念して、種々の行事を計画しておるようですが、中でも本会と関係の深い、古田重二良先生の銅像建立について申し上げたいと思います。

昨年の本会の総会の折に、議事以外の課題として、昭和22年工学部の設置に多大な精魂を傾注され、且つその後の発展に身命を投げ打ち、我々校友への恩恵の計り知れない、古田先生の胸像を記念行事として設立しては、との機運はあったのですが、たまたま、日本大学校友会福島県支部、日本大学工学部父兄会、日本大学工学部、東北工業高等学校両教職員の方々から、期せずして古田先生の顕彰銅像設立と云う御発声がありましたので、本会としては直ちに賛意を表し、4者で構成する、古田重二良先生顕彰銅像建立実行委員会を設置いたしました。

外木有光学部長が、実行委員長になっていただき、目下、事務分担を決め、推進の労をわざらわしております。会員の皆様におかれましては、趣旨、良く御理解下さいまして、応分の御協力を御願い申し上げます銅像の除幕式は、本年10月末頃に予定しております。一同にて、母校のキャンパスに先生の英姿を見たいものと、衷心よりつつがなき建立を祈念しております。

さて、本会会員数も年々確実に増加し、本会会務運営のためには、支部の設置が重要な懸案となつて参りました。現在3支部を有していますが、予算等の都合で、せめて、8大都市程度に増設し、目的の達成を計りたいと考えています。

又、本学の就職援助の件では、前報で事業部長より報告いたしましたとおりですが、本年はこれを事業内容に織込み、活発な援助活動を展開いたしたい所存であります。諸兄におかれましては、よろしく御案内下さいますよう御願い致します。

会員皆々様の御活躍と御健勝を祈念してごあいさつといたします。

(土木科第3回卒業・郡山市水道局勤務)

ごあいさつ

日本大学工学部父兄会

会長 吉 富 安 孝



輝やかしい新春を迎えお慶び申し上げます。

校友会の皆様には益々ご健祥にて職責にお勤みの事、私共、父兄会にとりまして誠によろこばしく心強い限りであります。

環境は人をつくり、人により環境がつくられると言われますが、私共の子弟が素晴らしい環境に恵まれた学園、そして先輩たる皆さんの残された校風、伝統こそ他に優るものであり、学生、生活の励みと誇りでもあります。そうした中で学問の探究に、課外活動による自己修練がなされ、クラブ活動こそ相互理解の場であり、より豊かな心の培養に欠かせないものと存じ子弟の幸せを感じるものであります。

昨年12月、恵まれない人達に明るい正月をと、歳末助け合い運動が行われ、恒例の募金運動を工学部体育会の学生が寒空の中で道行く人に呼びかけ募金に協力新聞に或いはテレビに放映される姿を見るにつけ、先輩各位の美風が継承されて居る事を思う時、面白躍如たるものがあります。これ偏に校友会の皆様より寄せられる励ましと、より一層の勉学をと図書の寄贈、クラブ活動の助成、その他、多額のご援助に預り、また特に、子弟を遠隔地に送りその安否を気づかう父兄の不安解消をと懇切丁寧なる下宿の斡旋など多種多様

学術研究報告会開かれる

日本大学工学部の最大の行事の一つである工学部学術研究報告会は、第19回目となり、去る昭和51年12月21日午前9時30分から午後4時まで、工学部の8会場において、内外の関係者を集め、盛況裡に終了した。演題は、自然科学関係8テーマ、人文科学関係4テーマ、土木工学科19テーマ、建築学科、構造系17テーマ計画系19テーマ、機械工学科23テーマ、電気工学科17テーマ、工業化学科13テーマ、合計 120テーマ、これにたずさわった研究者は、延べ 270名余であります。しかも研究者の多くは、工学部の卒業生で占められ、研究上、決して有利な点ばかりでない郡山で一生懸命努力をし、母校の後盾となっていることは、特筆すべきであります。

専門部工科の移設に発した新制大学、第二工学部時代、師弟ともども育てあげてきた母校で、いつも悩んでいたのは、教授陣容の拡充と、書籍の入手であったことを思うと、この規模は、誠に大きく、しかも意義深いものがあります。

研究内容について、門外漢の申すべき事ではありませんが、基礎事項や、今日上の工学的テーマなど、特に目につき、内容も一段と充実しているようです。

に亘っての積極的な御配慮を心から御礼申し上げます

日大専門部工科として郡山の地に誕生した工学部も本年度は開校30周年の記念すべき年にあたりますが、今や名実ともに大学園に飛躍発展し、多くの卒業生たる皆さんのが、各分野に於てのご活躍される姿こそ30年の歴史であり、その重厚さを感じ取る事が出来ます。

広大なる敷地、偉容を誇示する学舎、家族大学をモットーとする学部長先生はじめ教職員の方々の親身のご教導、調和ある学園それは日本大学工学部と自負、確信をいたすものであります。またこのような蔭には偉大なる協力、推進者の有った事を私共は忘れられないと思います。今は亡き、日本大学会長であられた、古田重二良先生こそ、本校創設に、そして学園の拡張内容の充実に心血を注がれ、今日の工学部の隆盛発展に貢献され、従って先生の功績を永遠に顕彰するため銅像建立の議が起り、工学部、校友会、県支部、父兄会等が協力して建設する事に成了った次第で、先生は生涯を日本大学に奉じ何れの混乱期にあっても最高責任者としてその敏腕を振われました。工学部の今日あるを思う時、その偉大なるや、正に多大であり、筆舌に尽くし難く、報恩感謝の念からして、建立こそ然るべきと思うのであります。父兄会も校友会の皆さんに支えられながら堅実な歩みを続けて居りますが、工学部校友会、父兄会の今後の密接なる連繋、協調こそ学部の発展の根源と信じます。校友会員の皆様の御健康と御多幸を衷心よりお祈り申し上げます。

年々発表されるこれらの論文は、いずれまとめられ、関係各学界や、あるいはかかるべき場において発表されることであります。

我が校友会員の各位におかれましても、多くの方々が職場や研究機関などで、発表できる内容を御持ちでありますと伺っています。

工学部では、校友の報告会への参加を毎年募集していますので、御希望の方は、是非申し込まれるよう御案内いたします。

次の開催日は、昭和52年12月21日の予定です、申し込みに関する手続等は本会事務局でも取り扱います。

なお、日本大学工学研究所は、本学の学術研究の成果を総括して擁し、学外からの依頼研究や実験を行なっています。

また、大学院の在学生人数は、前期（1、2年）土木工学科9名、建築工学科20名、機械工学科7名、電気工学科4名、工業化学科3名、後期（3～）機械工学科3名、電気工学科2名の総計48名であります。

これら研究所や大学院は、今後の工学部の伸展を助ける強力な原動力でありますから、活発な活動を期待したいと思います。
(事務局)

欧州各国を視察して 後藤 尚



海外の状況は、校友の多くの方が海外駐在や職務で海外出張され、また留学されており、その実情を理解されていますので、この方々の報告が有意義であると思思います。事務局からの依頼により一筆とのことなので愚文を書くことになりました。

今夏、大学より海外派遣を命ぜられ、水質の汚濁状況と汚濁成分の分析法の調査研究で欧州諸国（8カ国）を視察してきました。

河川の実態や工業の実状を直接見ることが出来、有意義な資料を得ました。

生活排水等の処理は進歩しており、ロンドン市内には8カ所の処理場があり、小さな村落にも処理場がみられます。水処理関連企業は各國共に多く、汚染防止には留意され、企業が周辺の住民の排水を処理している工場もあります。

河川の外観は山水明美の日本の感覚は通用しないと感じました。チロル地方の河川も万年雪がとけ流れていると思いますが、白味を帯びていますし、大陸の河川も青黒味や泥水の色調をし、一方、飲料水も硬度が高くうまいとは云えないものです。これは地質が石灰質系の影響を受けているためだと思います。

大陸の河川は産業、生活の流通の動脈であると同時に排水路でもあり、各国を貫通するので、汚染には特に留意されていると考えます。処理の重点は有機物による汚染、特にBOD、CODにあるようで、重金属等に関しては今後の問題で、処理物の廃棄には日本程のきびしがなく、重金属含有基準も検討しているようでした。重金属については土地投棄したときの植物への影響が主題であるようです。この点生活様式の異なる日本とは少々異なっていると思いますが、重金属の処理も多く検討がみられます。CODの測定は重クロム酸法がとられているので、有機質の汚染が著しいと考えます。

視察を兼ね各國の生活など自分なりに感じたことを申しますと、果物、野菜類は日本ほど種類もなく、スーパーなどにしても種類や数量は少なく、大型店もないことは、日本は豊かな国であり、米国の影響を受け

ていると感じます。

公園は各國ともにすばらしく、公園での市民のすがし方も参考になりました。日本人の勤勉さは一面では気忙しいように感じられ、この点、欧州の人々はノンビリしたものです。ウイーンで地下鉄工事が市内各所で行なわれていましたが、5年になるが、完成は見通しがないようで、2~3人がノンビリとやっている状況でした。私も在欧中はノンビリとした気分で送れたと思っています。公園などのすばらしさは、国民性や気候風土によるのでしょうか、庭付一戸建の住宅でも庭に植木を植えて楽しむという日本の面ではなく、公園などで社交をかねて楽しむということから完備されているのではと思いました。

ベニスの公園で夕方、付近の人々が集まりベンチで楽しそうに語っていたし、ロンドンでは肌寒くなつた9月初め、時折り降る小雨でも老人達が公園で過ごしていました。チボリ公園の夜景これもすばらしく、夏の短い一時を夜遅くまで過ごしていました。公園は生活になくてならないものと感じます。

水ということに再度触れますと、今年は欧州各國は日照で水不足に悩まされました。8月1日パリに入りましたが、一週間前に雨が降り平年の気温となつたとのことでしたが、街路には枯葉が多く水不足での立木の枯死でした。8月23日ロンドンに参りましたがこちらでは雨がなく、60年来の日照とかで、世界的公園の芝生も枯れ、褐色のジュータンと云う所です。立木の枯葉も多く、噴水も止まり、水道も時間給水で、テムズ河の水量もひいあがったと云う所で、河底もみられました。この状況をみると水というものの偉大さを痛感せざるをえません。渡欧中は暑い毎日でしたが日本では雨の夏だったと帰国して聞き、天候というものに改めて考えさせられ、自然の偉力が我々の生活を支配していることを改めて痛感する次第です。

水の汚染を考えると我々は汚濁を防止し、生活環境を豊かにして、将来への遺産とする必要性を感じます。

各界にて活動されている校友の方々には現状の経済状況は十二分に周知されそれに対応されていると思います。欧州各國の状況をみて、日本をみると重ねて申すようですが、日本は色々の面で恵まれているといえるでしょう。欧州での日本商品はめざましいものであり、これが日本経済を支えていることになります。EC諸国との貿易の申入れ、石油の値上等の問題は我々には大変に重いものであり、200海里のことでも生活への影響が著しく波及すると思います。現状の豊かさを更に発展させるには、各界での校友の方々の英知と発想の実践であると思います。

工業力の進展が我国の貿易を決定すると考えます。古い伝統を守り新しい進歩をしている欧州を見て、また、環境保全に力を入れている各國の努力から、私も

色々なことを学び得たことに感謝しています。渡欧中、失敗もありましたが、何分にも発音には悩されました。積極性が一番と感じました。中年男の一人旅で親切にしてくれたのは男性と中年以上の女性でした。若い美人の娘さんは言葉が通じるには時間をするというところでした。ペニスで夏の夕暮に各

家庭から公園に集まり楽しげに社交をしている光景やチボリ公園の夜景のすばらしさ、カラカラ浴場での野外オペラのスペクタルなど欧洲でのことなど想出も楽しいものもありました。

校友各位の発展を期待し、愚文を終ります。

(筆者工業化学科第2回卒業・日本大学工学部助教授)

米国研究生活一年間

上崎省吾



昭和50年9月から一年間、米国コロラド州ボルダーにあるコロラド大学（環境科学研究所）に滞在した。ボルダーは人口10万人の大学と研究所中心の小さい町である。海拔2000m 濡度5%以下で、一年を通じてほとんど雨が降らないので毎日青空の連続である。近くにはロッキー国立公園があり、週末は有意義にすごすことができた。以前この研究所には、前東大地震研究室長力武常次教授がおられ、しかも教授の研究していた同室で研究することが出来た。研究所の主な仕事は地球科学、電波伝播、地震の予知等である。所長は1964年から一年間東京に滞在しており、日本ファンで日本人びいきである。研究所の所員は半数が米国人であるが、日本人3人（東大・京大・群大）、中国人3人、ドイツ・ソ連・スイス人（フランス人を除く）等で成っており、私は米国滞在中に出来ただけ多くの人々に接する様に努力し、多くの友人を得た。その間各種のパーティー、ディナー等に招待したり、されたりしたがその目的は英語上達の為であった。英語上達の秘訣は出来るだけ多くのアメリカ人と話すことと思い、日本人との交際は出来るだけひかえめにした。英会話で特に感じた点は、思ったことは表現してみることである、RとLの発音がうまく出来ないと相手に通じないこと、そして声の小さい人、アクセントの強い人の話はとても判りにくいものである。

私の指導教授はJ.R.Waitであり、電波部門では非常に有名である。彼は私の発表した論文をよく知っていた為、彼のところへ行くための連絡は簡単についていた。私は彼のもとで、空電中における過度電磁波の放射に関する研究を主として行なった。微分方程式の解を求めるのに4ヶ月、二重積分及び数値計算で3ヶ月必要とした。その期間研究が思うように進まず、非常に焦った。私は1月初め思い切って、メキシコへ一週間の旅に出た、その結果突破口の手口を見つけることができた。それらの研究結果は各種セミナー、学会等で発表、二つの論文がPure and Applied Geophysicsに掲載が決定している。その様な訳で非常に有意義かつ楽しく研究及び余暇を過ごすことが出来たのであった。

その間多くの人々と接し、特にアメリカ人については論文が書ける位に注意深く観察した。その結果アメリカ人はヨーロッパ人に比べても、プライバシーを大切にするあまり多くの友人はできても、親友をつくることは本当に難しいと思った。しかし親子、兄弟の親密度は高いようにみえた。アメリカ人の平均月給は約1200ドル、600ドルの人は貧乏人、2000ドル以上の人には約5%以下で所得税は25%である。全ての支出（食事・雑貨物等）は5%の税金、チップは15%である。またアメリカにおいては車は必需品であり、一家の平均所有台数は2~4台である、それらは大型車、小型車及びライトバン、キャンピングカー等である。そのような訳でアメリカ人の生活は必ずしも楽ではないようである。外車も多く半数近くを占めている、その中で日本製車も多く世界的にみて日本製品は非常に有名である。日本はどこにあるか知らないと言う人々は多いが、日本と言う言葉は良く知られている。日本製品の中でもカメラは抜群に有名である、ドイツ製等をぐんと抜いておりレースにならない。世界一である。私の考えでは、光学製品に対する輸入ボイコットはないと思われる。しかし自動車、エレクトロニクス製品も非常に有名であるが、他国の製品と競合の可能性があり、それらの製品の風当たりは強いと思われる。その様な意味からも、日本が生き残る為には世界一の製品をつくり出さねばならないと思う。一般にアメリカ人は日本に対する認識が少ない、しかし自分の国だけはよく知っている。我々日本人は英語を真剣に学ばねばならないが、アメリカ人にはそれがない。例えば高等学校では、ヨーロッパの歴史、ヨーロッパの言語は学ぶが日本史は学ばない。丁度これは我々が東南アジアの事を知らないのと同じである。私はアメリカ人に会う毎に日本、日本のすばらしさ、ユニークさについて説明につとめたのである。そして研究所を去る時私は日本から送って頂いた盆栽の本（アメリカで有名なので）、ニューヨークで買った大きく美しい日本の写真（アメリカ人は富士山の写真が特に好きである）等をオフィスの壁にはってきた。今後の日本人にとって心のきさえになるのではないかと思っている。紙面の関係で筆をおくが、研究報告等に関しては次を参照して頂きたい。「米国に於ける電磁波工学の研究（コロラド州ボルダーを中心にして）電気学会電磁界理論研究会、EMT-76-69」
(筆者 電気工学科第9回卒業・群馬大学工学部助教授工学博士)

『工学部三十年史』(仮称)の編纂 今秋にむかって着々と進行

工学部開設30周年記念事業の一つとして、『工学部三十年史』(仮称)の編纂が、工学部史編纂実行委員会（委員長廣川友雄教授）によって着々と進められています。

これまで工学部の通史としてはまとめられたものなく、古い文書をあたったりして、その完璧をはかっています。たとえば昭和22年開設当時の大学と国・県・市・アメリカ軍政府などとの関連が、目の目をみるだろうと期待されています。

廣川委員長にうかがったところ、全体には通史・回想・年表に分かれるが、通史の目次は大略次のようになるだろうとの話でした。

目 次 (抄)

第一章 創立時代

第一節 専門部工科移転の気運

郡山第一第二海軍航空隊の設置 戦争下の状況
終戦と米軍の進駐 校友間における提案と日本大学および福島県の動向 大学関係者の現地視察

第二節 専門部工科移設

移設認可まで 地元の協力 移設の認可 移設の準備 福島軍政府および仙台財務局との関係

第三節 専門部工科

入学試験 教授陣容 教職員寮および学生寮 校地が米軍より大蔵省へ移管 校地が大蔵省より福島県へ移管 校地と建物が福島県より無償貸与 橋本農園の寄付申込 移転祭 スケート選手の活躍 専門部工科の終末

第二章 第二工学部の創設と興隆第一期

第一節 第二工学部の創設

第二工学部創設の経緯 第二工学部設置認可申請と審査 各科実験室の整備 第二工学部の発足

第二節 当初の運営

教育上の苦心 森の家と職員寮 学生との折衝
四年生東京で受講 郡山市助成金 就職開拓

第三節 郡山学園の形成

東北工業高等学校の申請と認可 学生募集 再修生と転部 工学祭 研究報告の発刊と学術講演会
模型飛行機大会 北心寮

第四節 新校舎の建築

校地問題の経緯とその解決 契約書の記載 新校舎の建築

第三章 興隆第二期

第一節 施設の充実

記念図書館 大講堂の完成 森の家 俊英学寮・

東磐梯寮の建設 学内外の用地・道路・橋の整備

第二節 教育の充実

開設科目と担当者 研究・教育設備の充実 合同卒業式への参加 図書館略史

第三節 教員の動向

学術講演会 紀要の発刊 海外出張者

第四節 学生の動向

学生委員会の活動 校友会の発足とその後

第四章 学部名改称から現在まで

第一部 学部名称の変更

学部名問題 学部名変更推進委員会 申請と認可

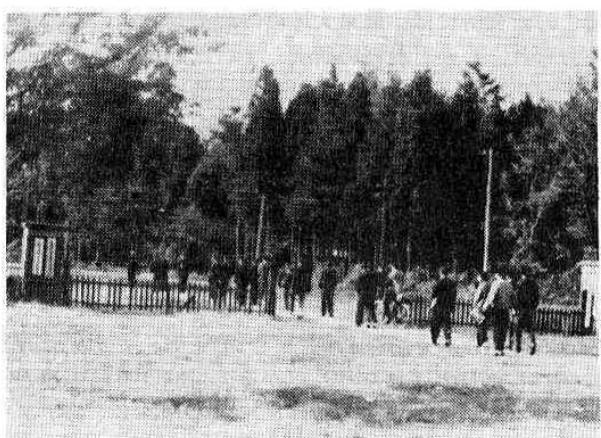
第二節 開設二十年式典前後

二十周年記念式典 横地学部長の死去と新学部長の任命 入学者選抜法の改新

第三節 日大紛争

第四節 開設三十周年まで

第五章 現状



(写真説明) 昭和24年頃の正門の登校風景=浜崎次郎氏（専門部1回卒）提供……このような資料がありましたらお貸し下さい。(教務課神村まで連絡を乞う)

『工学部三十年史』の配布について

『工学部三十年史』(仮称)は、前掲のような内容で編集され、今年の11月初めに、約500ページの予定で刊行されます。限定出版ですので、希望者には次の方法で配布することになりました。

- 希望者は金1,800円(送料等300円を含む)を校友会に送金して申し込む。
- 送金の方法は、現金書留か郵便振替（郡山1990番・日本大学工学部校友会）のどちらかとする。
- 申し込みの期限は6月30日。
- 校友会に申し込み出来る者は卒業生に限る。

北海道支部近況について

北海道支部長 神田哲夫

建設現場の多様な音も北海道の冬期間においては、殆ど聞くことができなくなった。そして北海道の技術屋さんは熊のように冬眠することになる。この時期に当支部の例会を開催すると最も盛況に終ると予想されるが、それが仲々困難であることが判った。その一つに北海道の地域性で、道内のどこで開催する（殆ど札幌開催）としても、あまりにも遠距離すぎるし、吹雪になるとともに出席は不可能になる。また一つには最近殆どの企業体が全国的に支社、支店を有していることにより、夏道内の現場を担当していた技術屋さんも冬になると、南国の現場へと離道してしまうケースが多く総会はどうしても夏期に行なわなければならない。また夏期開催には大きなメリットがある。それ

は発足まもない当支部にとって、工学部主催の先生方と在学生の父兄との懇談会が毎年行なわれるので、それと合せ開催することにより校友は、各学科の先生方と久しく懇談でき、また支部としても費用の面でかなりメリットがある。

当支部も漸く3年が経過し、名簿も完全とはいえないが出来上がり毎年約100名の校友が出席され、盛大に会が催されていることは本当に喜ばしいことである。毎年参加人数も増え、出席したいがどうしても出席できないので是非名簿だけでもと言う校友も増え、良い傾向であると考えている。最後になりましたが、学部の発展そして当支部の発展のため多くの校友の力添えをお願いし、微力ながら私自身も骨身をおしまないつもりである。

(筆者 土木科第6回卒業・東急道路札幌支店勤務)

学部祭(北桜祭)

大運動会に参加して

「鳥が飛んでなぜ悪い」をテーマとした今年の第26回日本大学工学部祭(北桜祭)は去る10月30日～11月3日までの5日間、好天気にめぐまれて盛大に行われ、無事終了いたしました。

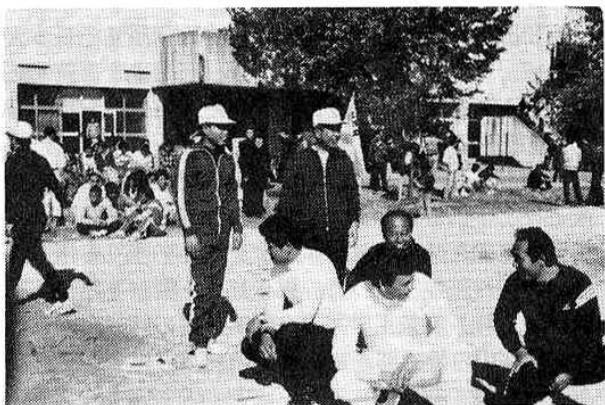
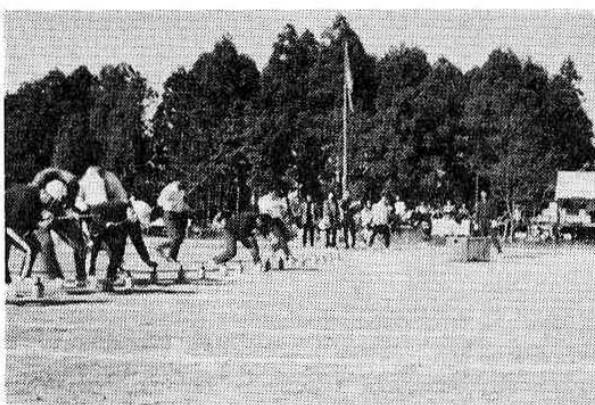
学部祭行事の大運動会は11月3日文化の日、加えて例年ない快晴にめぐまれ、午前11時より東北工業高等学校グラウンドに於て、教職員、学生、父兄、校友の多数が参加して開催された。

毎年学校当局、実行委員会より案内状を載きながら条件が整わず参加を断念していたが、今回校友各位の御協力を得、大運動会に校友会として初参加いたしました。当日は好みのユニホーム、トレーニングシャツ姿で会場に集まり、われこそはと闘志を燃やし出番を待った。しかし競技場でおもいきり競技するのは何十年ぶりという方々ばかり、最初の頃は胸はワクワク、ハラハラで足が地につかず、手のひらが汗ばみ、緊張のあまりトイレに行く回数が多く、落ちつかなかった競技中頃より、落ちつきをとりもどし、感も冴え、出

場種目毎に上位入賞する様になった。速さと感が折り込んだ、宝探し、手先きの技がさえるピン釣り等は男女、老若一緒になっての競技、自分がほしいものが相手の方がまちがって持ちさられた為に、入賞を逸する者、競技をすべて、ウイスキーピンを釣れるまでがんばる者、等、焦りと爆笑が入り交じるプレーが見られた。大運動会の終番 800メートル・リレー種目は1位入賞をかけた大一番、選手一同はりつけたレースであったが、600メートル地点でのバトンタッチのミスがたり、1位との差、ゴール前5メートルをアンカー松山会長が追い抜くことができず、第2位でゴールインした。競技には役員の外職員も参加し、好成績をさせ、終日秋空の下和気あいあいのうちに楽しく過ごすことができた。翌日は足腰がいたみ身体のなまっていることを教えられた。

学部祭は終日にわたって、校友、父兄、郡山市民の参加をえて、盛会のうちに、有終の美を飾ることができたのは、学校当局、並びに実行委員会、関係各団体の絶大なるご協力の結果だと思います。毎年やって来る学部祭が来る年毎に充実され、すぐれたものになってくれることを期待したい。

(半沢副会長 記)



郡山市役所桜門会総会開催

武 藤 貞 泰

工学部の膝元である郡山市役所に全日本大学校友会福島県支部郡山市役所分会が結成されたのは、昭和33年であります。当時地元出身の本学部土木3回卒の太田雄八郎氏（現分会長）ら有志により会員18名で発足して以来、現在会員143名となった。出身学部としては工学部（本学の前身である専門部工科を含む30名）理工学部、法、文、経、商、芸、とほぼ全学部にまたがっている。分会の活動としては、年1回の総会及び歓送迎会等会員相互の親睦を高めると同時に本学及び郡山市発展のため日夜がんばっている。

昭和51年度の総会もさる10月20日夕開館まもない日本大学郡山セミナーハウスに於て会員120名と分会顧問である外木工学部長及び石田事務長、工学部校友会から半沢副会長をむかえて盛大に行なわれた。又福島県支部長で長年郡山市助役とし分会名誉会長であった高橋堯氏が10月1日助役を退任されたため同氏の送別会も兼ねて行なわれこれまでの労をねぎらうと同時に同氏の今後の活躍を期待して会は終了した。

（筆者 土木工学科第8回卒業・郡山市役所下水道課勤務
分会幹事）



同級会雑感

高久田 稔

昭和36年の3月、東京両国の日本大学講堂で日本大学の統一卒業式が行われ、工学部（当時はまだ第二工学部であったが）の第9回卒業生である我々も他の学部の卒業生と共に式に臨み、卒業証書を授与された感激は今も忘れられない想い出の一つである。卒業式の後、理工学部の校舎で諸先生方、校友会の諸先輩から卒業の祝福を受け、互いに再会を約し名残りを惜しみながら別れたのであった。爾来15年を経た本年（昭和51年）7月、電気工学科第9回卒業生の同級会が、懐かしい郡山の地で開かれ、互いの無事と再会とを喜びあつた。

7月3日の土曜日、会場にあてられた磐梯熱海の旅館には遠く大阪、愛知、長野などの各地から懐かしい顔ぶれが、23人集まつた。卒業以来15年ぶりに再会する場面が大半であったが、その年月はたちまちのうちに忘れ去られ、かつての学生時代の「お前」「おれ」に戻り、まるで昨日別れたばかりであるかのような感であった。会は今回のまとめ役の1人である岩間貴行氏（君ではなく氏であることが15年の年月の経過を示している）の挨拶で始まり、同級会を企画した経過、連絡がどうしてもとれない者もいて、同級生全員に通知が行き渡らなかったこと、今後も出来るだけ毎年続けてゆきたいなどの報告が行われ、続いて入学以来現在に至るまで何かとお世話を頂いている本間先生の挨拶があり、その後出席者全員での自己紹介が行われた。本間先生の話のなかで、先生が来年60才になるとのくだりでは、全員あらためて年月の経ったことを痛感し、又60才になるとは思えない先生の以前と変らぬ若さにも改めて感心させられた。自己紹介の話のなかにも子供のことには多く、やはり15年の年月がたつたのだなと感じさせられました。15年ぶりの再会ではあったが、学生時代の面影はほとんど皆失われていず、互いに話をしても空白はさほど感じられなかったことは1つの収穫であった。自己紹介の後は、会場のあちこちで車座になっての話がはずみ、夜の更けるのも忘れる程であった。

今回の同級会で思ったことは、共通の想い出を持っていることは貴重なことなのだと云うことだった。特に学生時代のように直接の利害関係のない時期を共にすごしたことは、それが4年間という短い期間であっても、又その前後には互いに接触がなくとも、顔をあわせればすぐに昔の友情が戻ってくるのはなんと素晴らしいことなのかと思った。

つきせぬ話を残し、翌日の朝、再会を約して又各地へと散つていったが、又次回顔をあわせれば、懐かしい学生時代に戻り、つかの間の青春のひとときをすごすことであろう。

（筆者 電気工学科第9回卒業・福島県立白河農工高等学校勤務）



日本大学工学部直属団体 自動車部創立20周年記念を祝う

去る昭和51年11月22日、郡山市内熱田家に於いて自動車部OB会主催、自動車部協力のもとで「工学部直属団体自動車部創立20周年記念式典」を行った。式典には外木工学部長、木村次長、一色学生生活委員長および並木自動車部部長の来賓をはじめ、OB諸氏、現役部員など約130名が出席して盛大に行われました。

初代自動車部部長でもあられた外木先生の来賓祝辞で、自動車部発足当時の概要を述べられ、OBにとっては感慨深く聞き入り、また現役部員にとっては自動車部の生い立ちを改めて見直したことでしょう。また近年の自動車部々活動報告の中でもとりわけ、過去4年間連続善行賞の栄誉に輝き、さらに対外学自連の年間総合優勝という立派な成績はOBにとってこの上な

い喜びであります。これも偏に学部当局のご尽力の賜とお礼申し上げますと共に、OB会も最大限の協力を惜しまないので現役部員も自動車部の誇りと伝統を守りますます発展を祈願致します。

(自動車部OB会事務局H・W)



体育会弓道部を訪ねて

弓道とは、全長212cm(7尺)ほどの長弓を使って的を射る(直径36cm、158cmの的に28m離れて射る)動作を儒教の礼に従って美化した国技であります。弓道部は、東洋精神の理解と心身の健全な育成、部員相互の融和と豊かな人間性の啓発を目的に設立され、すでに16年が過ぎました。

この間絶え間ない練習と対外的交流を通じて、目的の達成に努力している。年間の行事の中から抜粋すると、春の合宿、新入生歓迎会、郡山女子大学との親睦芋煮会、夏の強化練習、冬の送別会、体育会行事参加インカレならびに福島大学、東北学院大学、山形大学との定期戦、全日本、東北学生弓道連盟の正会員として、春秋季大会、記録会への参加、福島県、県南、郡山市弓道連盟にそれぞれ席をおいて、春夏秋季に催する大会に出場する。また特に、春と秋には全日本弓道連盟主催の昇段審査には積極的に参加し、単なる「あ

たり」だけでなく、弓の道の「本質」に向って活動している。更に機関誌「つるね」を発行して、年間成績住所録、紹介事項などをまとめて広報し、部員、先輩との幅広いつながりを保とうと努めている。昨年は、地方審査で他の大学に類を見ない四段7名合格とか、東北学生総合体育大会に優勝したとのことであります

(事務局)



ワンダーフォーゲル部を訪ねて

自分の力による簡素な野外活動を通して、見聞を広め、しかも団体活動によって、社会性豊かな習慣と人間性あふれる教養を高めることを目的に、15年前に結成された、顧問に機械2回卒の菅野宗和助教授を迎えた部員は40名を擁する大部隊である。

一年間の主な活動は、例会、清掃ワンデリング、夏の合宿、合同ワンデリング、スキー合宿、春の合宿などがある。

清掃ワンデリングは、東北学生ワンダーフォーゲル連盟が中心となり毎年行なっているもので、工学部は、磐梯山を中心に空缶や紙屑などの回収に当り、自然保護に一役かって、猪苗代町より表彰されている。

夏の合宿は、一年間の活動の頂点で、昭和51年には、南アルプス大雪山系に分散入山した。

スキー合宿は、冬期間の重要な活動で、山で鍛えた足腰を活かし、東北の冬をスキーで知る好機もある。春の合宿は、平地ワンデリングを行ない、自然よりもむしろ民俗、風土に親しむことを主にしている。

これ等の活動には、OBとの交歓も行なわれ、機関誌「ふみあと」にも見られるように、実り多いクラブとなっている。

…岩に咲く小さな花を見るとき、生命力の強さを感じ
苦しい荷上げで粘り強さと根性を考え…

ふみあとより詩の一部
(事務局)

東海支部ゴルフ愛好会誕生

東海支部にゴルフ愛好会誕生し、名称は東桜会とする。東海支部も誕生して早や5年、本年も例年どおり支部総会が去る、6月26日ホテルニューナゴヤで盛会に開催された。我らが東海支部総会の宴席で、先輩後輩そして中年をむかえ腹の出っ張り具合を気にしながら何やら相談中のグループに近づくと、「どうだ何時も飲んでばかりいないで、たまにはゴルフでもやろうじゃないかななど」……、ゴルフ好きの自分を奮い立たせるような会話が聞こえて来た。

不況とはいえ結構皆楽しんでいるのだなとばかり、早速仲間入り「小人数でやれるのも良いが、一つ愛好会を結成しコンペをやろうじゃないか」ということになり、早速希望者を募ったところ20名程が即座にOK、とりあえず荒井勝雄（土5回）河野叶（土6回）の両氏に準備を依頼し、追って通知することで一件落着。旬日を経ずして、7月30日に開催する旨の通知がきた送られてきた出席者名簿に目をやると、遊びこそが生き甲斐のような連中16名の名前が並んでいた。

昨年からゲスト的な立場で、東海支部の会合に出席している藤原正臣、渡辺博之（土6回）両氏らも遠く静岡から参加の申し込みがされていた。

さて当日になった訳だが、職場での管理職が多いためか、平日にセットしたためかはたまた、腕前に自信をなくしたのか、多忙を理由に6名が欠席し、飛び入りの鈴木健夫氏（土14回）を含む下記11名によってコンペすることになった。

全員がよく見えないようにと云うことから、第1打席をドライビングテストとして熱戦の幕がおとされた平日の東名古屋カントリークラブのコースは、ホールの数36ホールズとゆとりがあり、加えて隣り合せに美濃ホールズのパブリックコースがあることから、貸切

日本大学 材料工学談話会

この会は学部内の材料工学の分野を研究されている先生方有志の集まりで、その目的は各自の研究成果を報告しあったり、新技術などに関する相互の知識を交換したり、互いに励ましあって個々の研究の進展を期すると共に更に総合的な研究にまで発展させて行こうとするものである。

この会は昭和47年1月に発足して以来今年で6年目、第22回を迎えます充実した活動が行われている。最近では第21回の談話会において「超高強度コンクリートの製造について」と題して建築学科研究室の福地教授、大浜助教授より強度世界一のコンクリートが本学部で造り出されたことについての報告がなされ、学外でも話題を呼んだ。又次回は「溶接構造物の強さと

り同様であった、そんな訳で、特に当日に限り、マナーは無礼講とし、ワイワイガヤガヤ珍プレーが続出した。大きな腹をゆすりながら山本義雄氏（旧姓安藤土6回）が2本のドラコン賞、小さな体でフルスイングの縁川秀人氏（機3回）がホールインワン寸前？のニアピン賞を獲得するなど、全く愉快な一日であった、ちなみに当日の成績であるが、上位入賞以外はスコアを省略して欲しいと要望が出されたので、ハンディキャップのみご披露する。

		クロス	パー	ネット	
優勝	河野 叶（土6回）	86	14	72	賞 N.P.
2位	山本義雄（土2回）	93	17	76	LD2
3位	縁川秀人（機3回）	99	19	80	N.P.
4位	荒井勝雄（土5回）	—	20	—	
5位	平野 卓（土3回）	—	22	—	
6位	藤原正臣（土6回）	—	22	—	
7位	古川	—	30	—	
8位	浅田	—	30	—	
9位	下里	—	30	—	
10位	中西	—	36	—	
11位	鈴木	—	36	—	

表彰式台、会の名称、今後の運営方針について協議の結果、名称は東海支部の東と桜門会の桜をとり、東桜会とし、開催は四季毎に年4回と定めました。

また、新入会員は第1回はゲスト参加、次回からハンディキャップを決定、公式参加とすることなどを決め、汗まみれの第1回大回はつがなく会を閉ざすことができました。

全国各地でご活躍中の校友諸君、仕事に、家庭に、レクリエーションと人間生活の全てを通じて、扶けあい、励ましあえる良き先輩、後輩、そして同級生の結びつきがより一層強いものに発展することを願って、ゴルフコンペを開催した東海支部のある一日を紹介した次第です。
(東海支部事務局記)

「非破壊検査」と題して、機械工学科工作研究室の石井教授の講演が予定されている。

ストーブ寄贈される

向寒の時節に至り、豊臣機工株式会社に勤務する本学卒業生、宮崎義之（電8卒）、猪瀬敏郎、吉田邦夫（機9卒）、原口慎治（機11卒）、鈴木幹雄（機12卒）、小山肇、森口智之（機13卒）、加藤弘（機15卒）、因田茂、中西豊（機17卒）、水流直人（機21卒）の諸氏は、日本大学工学部校友会に対し、大型の送風式石油ストーブを寄贈されました。

これは、事務局に設置される予定であり、これから訪れる新入生の下宿斡旋事務などをすすめるのに大いに役立つものと思われます。（事務局記）

CAMPUS

mini-MEMO

◆オール日大体育祭に初の総合優勝

昭和51年度の日本大学体育祭（通算第5回）は、各学部の対抗戦の方式で、9月26日を皮切りに、各学部のグランドで行なわれ、フィナーレの陸上競技は、10月18日に千駄ヶ谷の国立霞ヶ丘競技場で行なわれた。その結果、大学の部で、工学部はV5をねらう文理世田谷をくだして、初の総合優勝をした。工学部の成績は次の通りである。

大学の部

軟式庭球（優勝）、端艇（優勝）、柔道（2位）、剣道（2位）、硬式庭球（2位）、卓球（3位）、軟式野球（3位）、サッカー（3位）、陸上競技（順位なし）、バレーボール（順位なし）、バスケットボール（順位なし）

総合=優勝

教職員の部

ソフトボール（3位）、陸上競技800mリレー（5位）

ゴルフ（10位）

総合=4位

51年度体育祭

商の猛追及ばず
3位生工、常勝文理は5位

工学部が初の総合優勝



日本大学新聞社
発行部数 1,012
年 51年 10月 11日
発行部数 1,197,616
定価 412円

◆校友の母校での教員（続き）

会報29号に統いて、本学部の卒業生で母校の教壇に立っている専任講師の人を紹介します。（昭和51年4月1日現在）

専任講師

土木工学科 小林秀一（7回） 村田吉晴（12回）

石井和樹（13回） 西村 孝（13回）

藤田龍之（14回） 原 忠勝（15回）

建築学科 三沢好夫（4回） 佐藤満夫（6回）

外山隆吉（6回） 小栗治男（7回）

黒田浩司（9回） 橋本 寛（10回）

機械工学科 柳沼福夫（5回） 佐藤光正（9回）

中村泰三（11回） 橋本耕吉（11回）

小野沢元久（13回） 柳沼孝佑（13回）

依田満夫（14回）

電気工学科 橋本義久（4回） 渡辺清末（4回）

宍戸敏雄（6回） 小林 力（13回）

杉浦義人（15回）

工業化学科 高野 操（3回）

一般教育科 星 一以（電11回）

卒業回数のうち、14回までは第二工学部の卒業であり、15回以降は工学部の卒業である。

◆在校生の出身高校分布

29号の県別の分布に統いて、出身高校別のベストテンを掲載します。（昭和51年5月1日現在）

付属高校関係

①日大東北工（福島）250名

②日大三島（静岡）122名

③日大山形（山形）89名

④佐野日大（栃木）70名

⑤宮崎日大（宮崎）68名

⑥土浦日大（茨城）59名

⑦大垣（岐阜）43名

⑧長崎日大（長崎）37名

⑨日大豊山（東京）23名

⑩日大鶴丘（東京）21名

付属高校以外

安積（福島）105名

田村（福島）50名

郡山工（福島）46名

須賀川（福島）44名

安達（福島）40名

福島工（福島）39名

新潟明訓（新潟）32名

新潟南（新潟）31名

太田第一（茨城）27名

郡山西工（福島）26名

壬生（栃木）26名

付属高校関係は910名で全体の約17%、それ以外の高校関係は4490名で約83%となっている。

（た）

事務局だより

日本大学工学部校友会
会 員 各 位

昭和52年3月1日

福島県郡山市田村町徳定字中河原1
日本大学工学部校友会
会長 松山光克

昭和52年度総会通知

全国各地において御活躍の校友諸兄姉各位には、益々御健勝のこととお慶び申し上げます。
さて、本会会則第29条により、日本大学工学部校友会昭和52年度総会を、下記により開催いたしますので、先輩・後輩をお誘いになられ多数御出席下さいますよう御通知申し上げます。
なお、欠席の方は、議事一切について委任されたものと認めますので御承認願います。

記

1. 日 時 昭和52年4月10日(日) 午後1時
2. 場 所 日本大学郡山セミナーhaus(郡山市愛宕町2-22)
3. 付 議 事 項 第1号議案 昭和51年度会務報告
第2号議案 昭和51年度会計決算報告
第3号議案 昭和52年度事業計画並びに予算案審議
第4号議案 昭和52年度役員選出
第5号議案 その他

追伸①諸般の事情により校友会報第30号に掲載の上記案内によって総会通知としますので御了承ねがいます。
②同セミナーhausに宿泊希望したい方は工学部庶務課に申し込まれたい。

セミナーhausに至る略図



交通案内

- 位置…愛宕町2-22
荒池公園南
- タクシー…駅前から10分以内
- バス…駅前バスセンター ③乗場にて山根廻り
菜根循環線に乗り、郡女高前下車
徒歩約5分

異動報告について

- 住所が変わったとき
- 勤務先が変わったとき
- 改姓したとき～旧姓もお忘れなく。

以上についてはなるべく早く、本会事務局宛にハガキ（又は電話）にて御連絡下さるよう御協力下さい。

昭和50年度あかしや寄贈図書名

工学部校友会事業の一つとして、昭和47年度から実施している母校図書館へ寄贈の「あかしや図書」は、昭和50年度について下記のとおりである。
お知らせしますので御活用下さい。

記

書名	卷号	冊数
Landolt - Burnstein	New Series Group 2-1	1
〃	〃 Group 2-5	1
〃	Group 3-7a	1
〃	Band 4-4a	1
〃	New Series Group 3-4b	1
〃	〃 Group 3-2	1
〃	〃 Group 3-7G	1
〃	Group 3-5a,b	2
Total		9

校友会報第30号

発行所 日本大学工学部校友会
福島県郡山市田村町徳定字中河原1
郵便番号 979-66
電話番号 郡山(0249)44-1327番
振替口座番号 (郡山)1990番
発行日 昭和52年2月1日
発行者代表 会長 松山光克
編集者代表 事務局長 佐藤光正